何があなたをそうさせているのか

武田恵美里
大阪府・一六・高校生

あなたは私の故郷に留まり、私はあなたの郷里を飛び発ち、早いのか遅いのか七ケ月経つね。ただの一通も手紙なんて送ってないよ。下書きしても、数分後には既にごみ箱の中。何も知らないんでしょう？　どれ程か時差を忘れて、それまでに幾度も木霊(こだま)したあなたの声を聞きたかった事か。夏に叔母さんの家でこっそり、天の川を仰いで受話器に汗を感じながら、聴こえて来た相変わらずぶっきらぼうで、ちょっと悪そうな響き。私の中の天の邪鬼が慌てて切っても、震える手はリダイヤルしたがってるのか後悔してるのか分からずにいる。ただ海を巡り伝わって来た温かみだけは偽ろうとしない。

私がこの世から消えてしまいたいと希望を失った時、あなたは静かに、でも嘘のない真剣な眼差しで言ったね。

「お前が眠るまで俺は此処に居てんで。お前を守ったる」

人間を信じる気力が毛頭なかった私なのに、あなたはこんな私を信じて疑おうとしなかった。あなたは世間体とか、人の目とか自分の立場を全く振り返ろうとしなかった。

あなたは私に何を託したいのですか。何故自ら逆境を選ぶのですか。何があなたをそうさせているのですか。

私達の関係は決して甘ったるい夢の様なものではない。それらを上回った、「師弟」にも似た絆で結ばれているんだと、私は確信し始めています。

あなたは乾き切った砂漠の一粒に過ぎなかった私に、満天の星空を教えてくれました。あなたの生き方を一言で表すなら、「怒濤」という言葉が一番しっくり来るね。あなたは本物のかっこよさと男らしさを、身を削ってでも貫き通す人だよね。もうすぐあなたはまた、もっと手の届かない所へ行ってしまうけど、私にとっては生涯「理想の英雄」だよ。最後にもう一つだけ我儘(わがまま)をきいてくれる？　次に生きる世界では、私をあなたの妹にして、ずっと離れずに側でも見守っていてくれる？

＊命を懸けて「自分の在り方」という誇りを突き通し、誰よりも自分自身に厳しく、それでいて底抜けに温かい心を持ったある人への想いをありのまま綴りました。